

## Program

- ◆ エイトール・ヴィラ＝ロボス：ブラジル風バッハ 第9番  
Heitor Villa-Lobos : Bachianas Brasileiras No.9

第一部 前奏曲／ゆっくりと神秘的に  
第二部 フーガ／少しテンポを上げて

- ◆ ジョルジュ・ビゼー作曲 / フリッツ・ホフマン編曲：  
『カルメン』第一組曲・第二組曲より抜粋  
Georges Bizet / Fritz Hoffmann : Carmen Suites (Extract)

1. トレアドル Les Toréadors  
2. 第一幕への前奏曲 Prélude  
3. アラゴネーズ Aragonaise  
4. 間奏曲 Intermezzo  
5. ハバネラ Habanera  
6. 闘牛士の歌 Chanson du Toréador  
7. ダンス・ボエーム Danse Bohème

- ドクターズトーク：「作曲家の病と音楽～そして命について考える」小林 修三

[ 休憩 Intermission 20 minutes ]

- ◆ アントニン・ドヴォルザーク：交響曲 第6番 二長調 作品60  
Antonín Dvořák : Symphony No. 6 in D major, Op. 60

第1楽章 Allegro non tanto  
第2楽章 Adagio  
第3楽章 Scherzo, Presto  
第4楽章 Finale, Allegro con spirito

演奏：湘南鎌倉フィルハーモニック管弦楽団

指揮：木許 裕介

13時45分より指揮者木許裕介氏によるプレトークがございます。

終演は16時00分頃を予定しております。

## ご挨拶

NPO法人 癒しの医療を考える会  
理事長 小林 修三

NPO法人癒しの医療を考える会は、「癒しの医療を求めて医療者と患者さんが一体となり、病気を克服していくこと」の実現を目指して、湘南地域を中心に、春と秋の年2回、医療講演と一体となったクラシック音楽演奏会を開催しています。「たとえ病に倒れても音楽の持つ力を最大限生かし明日に生きる勇気と希望を持つ」とを合言葉に20年活動しています。都内で活躍されている、こうした趣旨をご理解された演奏家を招き、毎回優れた演奏で多くの聴衆から好評を頂いています。

おもいやりと共感のある、温かな癒す医療は、組織の肥大化や医療改革に伴って、運営効率をあげなくてはならなくなった今こそ本当に必要です。先端医療の推進は「弱者を置き去りにしない」とことと両立させなくてはなりません。地域でそれぞれの医療施設が協力しあって優しい病院作りを考えていきたいと願っています。ギリシア神話に出てくる医神はアスクレピオスです。その父親がアポロンで、芸術と芸術は切っても切れない関係とされ、音楽を通して病を癒す試みがなされていました。コロナ禍の中で人が人に触れ合う機会が少なくなり、コロナでお亡くなりになるよりコロナ関連疾患で亡くなる人の方が多くなっている様に感じます。音楽は人類の生命維持装置だと述べたメルケルドイツ首相の言葉にありますように、忘れかけた心の健康を取り戻さなければなりません。

病院の歴史は6世紀イタリアのモンテカッシーノ修道院がその原形と考えられ、中世の時代には、裏庭で作られた薬草やワインなどが提供され治療薬として用いられていたそうです。パンとワイン、そしてあたたかな言葉と額に当てられた手の温もりで人々は癒されたとされます。

演奏会は2000年5月から開催され、最初は室内楽でしたが、オーケストラとしては2002年に、今や世界的指揮者、芸大指揮科を卒業して間もない山田和樹氏を迎え、モーツァルト交響曲第40番からスタートし、都合8年間にわたって演奏していただきました。2016年には多くの有名な演奏家に集まって頂き、湘南鎌倉フィルハーモニック管弦楽団を結成しました。昨年第25回の記念演奏会を契機に、地元鎌倉の教育委員会を通じ小学校高学年の生徒さんを招待し、舞台から「命とは何？」と問いかけています。

今後とも当法人や湘南鎌倉フィルハーモニック管弦楽団の活動をよろしくご支援くださいませ。



© Yasutaka Eida

### 指揮 木許 裕介 Yusuke Kimoto, Conductor

指揮者であり文筆家であり研究者であり教育者であり、分類不能なアーティスト (Artiste inclassable) として評される異才。イタリアを中心に欧州で研鑽を積み、2018年、BMW国際指揮コンクール (ポルトガル) にて日本人初の第1位優勝。おなじく2018年、出身の大阪府高槻市より「特別功労賞」を受賞。以降、国内のみならず世界各地のオーケストラや音楽祭から多数招聘され国際的な活動を繰り広げる。

ブラジル音楽のエキスパートとしても知られ、日本ヴィラ＝ロボス協会会長を務める。日本とブラジルを音楽で繋ぐ企画を精力的にプロデュースしており、2022年に駐日ブラジル大使館と共に企画・指揮した「ブラジル独立200周年記念コンサート」では満席のスタンディング・オベーションを巻き起こした。2023年には500ページの単著『ヴィラ＝ロボス-ブラジルの大地に歌わせるために』（春秋社）を上梓し、「日本におけるブラジルのクラシック音楽の普及にとって記念碑的な作品」と絶賛された。

国内では各地のプロオーケストラと共演するほか、ジュニア、ユース、大学オーケストラの指導に顕著な実績を挙げており、2021年よりエル・システマジャパン音楽監督に就任。「世界子ども音楽祭」など数々の音楽祭を成功に導く。音楽を通じた地域創生や、産業界と連携した音楽の場づくり・人づくりのプロジェクトなど革新的な活動でも注目を集めるなど、「音楽に何が出来るか」ということをめぐる数々のプロジェクトを展開している。湘南鎌倉フィルハーモニック管弦楽団とは昨年の第25回定期演奏会に続いて今回が2回目の共演となる。東京大学大学院修了、修士(学術)。

## 湘南鎌倉フィルハーモニック管弦楽団 2024

湘南鎌倉フィルハーモニック管弦楽団は2016年湘南の地に誕生したプロの演奏家によるオーケストラです。日本のクラシック音楽界をリードするメンバーが多数集い、NPO法人癒しの医療を考える会の趣旨に賛同し、会とともに活動しています。

コンサートマスター 塩貝 みつる	Va 中 恵菜 古屋 聡見 高木 真悠子	Fl 難波 薫 杉山 翼	Tp 中村 諒 中嶋 尚也
Vn1 外園 萌香 奥村 愛 小野 唯 塩川 翔子 高麗 愛子 清水 咲 保井 花子	Vc 海野 幹雄 高橋 麻理子 松浦 健太郎 藤野 真美 宮之原 陽太	Ob 石井 智章 沖 響子	Tb 渡辺 善行 奥村 尚美 星野 和音
Vn2 前田 尚徳 三浦 知香子 鈴木 浩司 雁瀬 心生 稲田 清香 中島 裕子 井上 桐子 山内 柚里	Cb 西山 真二 宮坂 典幸 長谷川 信久 高山 雄弘	Cl 亀井 良信 佐藤 由紀	Tu 若林 毅
		Fg 柿沼 麻美 西口 真央	Timp 小島 光 Per 菊池 悠平 瀧澤 綾子 佐藤 武瑠
		Hn 堀 風翔 小助川 大河 幸喜 いずみ 吉澤 夏未	Harp 篠崎 和子

### エイトール・ヴィラ＝ロボス (1887-1959) :

### ブラジル風バッハ 第9番 (1945)

### Heitor Villa-Lobos: Bachianas Brasileiras No.9

1887年にリオデジャネイロに生まれ、1959年に同地に没したヴィラ＝ロボス。72年の生涯においてこの作曲家が残した作品は他に例を見ないほど膨大で、今なお正確な全貌を把握することが難しい。連作「Bachianas Brasileiras (バキアーナス・ブラジレイラス)」は、彼の名を世界的に知らしめた傑作であると同時に、自由自在な編成によってブラジルの要素と西洋音楽の要素の融合を目指した野心作である。我が国においては慣例的に「ブラジル風バッハ」と訳されてきたが、これはブラジル風にバッハを換骨奪胎するといった「アレンジ」的な作品では決してなく、ブラジルのなものとバッハ的なものの両者の底に流れる水脈を探し当てて、それを一曲のなかで同時に表現するということを試みたものなのである。

本日演奏する第9番はシリーズの最後を飾る作品で、ヴィラ＝ロボスの友人であった作曲家/指揮者のアーロン・コーブランドに献呈。当初は無伴奏の6声合唱を想定して作曲されたが、あまりに演奏困難のため弦楽合奏版が作られるに至った。楽曲は前奏曲とフーガの二部から成り、二部が続けて演奏される。演奏時間は10分程度。

#### 第一部：前奏曲／ゆっくりと神秘的に

前奏曲冒頭では、鋭い響きによって生み出された音の霧のなかから、夜明けを告げる声のごとくヴィオラが歌い始める。わずか一音でその場を熱帯の森に変えてしまうヴィラ＝ロボスの魔法が遺憾無く発揮されている。

#### 第二部：フーガ／少しテンポを上げて

続くフーガは8分の11拍子。5拍子(＝ブラジル音楽に特徴的なリズム)＋6拍子(＝西洋音楽の源泉となるリズム。12世紀末のノートルダム楽派の当初は、三位一朗説を反映して、八分の六拍子が主要であった)が緊密に結びついてめぐりめぐる朗語を繰り広げる。リズム、旋律ともにブラジルのなものと西洋的なものが緊密に結びつけられており、Bachianas Brasileirasの名に相応しい。壮大な響きが打ち立てられたのち、最後に「ド」の音ただひとつに集約される様子は圧巻である。



(左) 木許裕介著：『ヴィラ＝ロボス -ブラジルの大地に歌わせるために-』（春秋社）  
(右) ヴィラ＝ロボスの使用していた楽器たち。リオデジャネイロのヴィラ＝ロボス博物館にて

ジョルジュ・ビゼー (1838-1875) 作曲/フリッツ・ホフマン編曲:

## 『カルメン』第一組曲・第二組曲より抜粋

Georges Bizet/ Fritz Hoffmann : Carmen Suites (Extract)

1875年に作曲されたオペラ「カルメン」。古今のオペラの中でも最もよく知られた作品の一つであり、どの瞬間を取り出しても彩り豊かな旋律に溢れる傑作である。舞台は1820年頃のスペイン、セヴィリアの街。純粋で真面目だった青年ドン・ホセが、ロマの女カルメンに誘惑され悪事に手を染めるようになっていく。カルメンに投げつけられたカシアの花、そしてカルメンのことが気になって仕方なくなり追いかけて続けるも、カルメンは闘牛士のエスカミーリョと恋に落ちたりと、ひたすらに自由奔放に生きる。嫉妬に狂ったドン・ホセはついにはカルメンのことを刺し殺してしまう…。愛と狂気、束縛と喪失、自由と死など、「カルメン」は現代においても我々に多くの問いを投げかける。本日演奏する「組曲」は、この「カルメン」の「美味しいところ取り」をしてオーケストラ用に編曲したもの。組曲中より以下の七曲を演奏する。演奏時間は20分程度。

### 1.トレアドール Les Toréadors

「カルメン」といえばこれ！オペラ本編では最初に演奏される曲で、わずか2分のうちに聞くものを虜にする。

### 2.第一幕への前奏曲 Prélude

エネルギーな第一曲から一転して不穏な雰囲気に。クラリネット、ファゴット、トランペット、チェロによって奏でられる旋律は、このオペラがたどる悲劇的な運命を暗示している。

### 3.アラゴネーズ Aragonaise

アラゴネーズとは、スペイン北部のアラゴン地方に伝わる伝統舞踏。オペラ本編では第四幕への間奏曲として演奏される。情熱的だがどこか悲劇的な雰囲気を漂わせる。タンバリンの調べとオーボエの旋律にぜひご注目（耳？）頂きたい。

### 4.間奏曲 Intermezzo

ドラマティックな曲が多いこのオペラのなかで、ほっと一息つけるような牧歌的な楽曲。オペラ本編では第三幕への間奏曲として夜の山の風景を描く役割を持っている。ハーブの分散和音に乗って朗々と歌うフルートソロは、フルート吹きにとっての憧れの曲。

### 5.ハバネラ Habanera

ハバネラは、キューバのハバナ地方由来の2拍子系舞曲。自由に生きるカルメンが、恋を野の鳥にたとえ、自身の恋愛哲学を歌い上げる。捕まえたと思ったら逃げていってしまう、逃げていったかと思うと逆にあなたを捕まえる…。

### 6.闘牛士の歌 Chanson du Toréador

第二幕で闘牛士のエスカミーリョが登場するシーンで歌われる曲。群衆に囲まれて派手に現れ、闘牛士たるものの誇りを歌う。Toréador（闘牛士）とL'amour（愛）が交互に歌われ両者を等価なものとして描く。愛もまた、死に至ることもある情熱的な戦いなのである…。

### 7.ダンス・ボエム Danse Bohème

第二幕の酒場でカルメンが歌い上げる舞踏曲。「踊りと歌がひとつになって／はじめはちょっと遠慮がち／次第に速さを増して高鳴っていく！」という歌詞の通り、弦とハーブの伴奏によってフルート2本が奏でるデュエットがオーケストラ全員を巻き込み大狂乱に至る。「歌のリズムに身を任せ／燃えて、狂って、熱狂して／なにかもかも忘れて酔いしれて／踊りの渦に身を委ねる！」

アントニン・ドヴォルザーク (1841-1904) :

## 交響曲 第6番 二長調 作品60 (1880)

Antonín Dvořák: Symphony No. 6 in D major, Op. 60

ドヴォルザークの交響曲といえば第8番や第9番「新世界より」が有名だが、それらはドヴォルザークが作曲家として大成してからの作品である。この交響曲第6番はドヴォルザーク40歳の頃の作品。1880年作曲で、初演は1881年にブラハにて。演奏時間は43分程度。

敬愛するベートーヴェンやブラームスの影響を存分に受けながらも、そこから脱し自分ならではの音楽を作り出そうと格闘していた頃に生み出されたものであり、彼の人生にとってターニング・ポイントとなる作品と言って良いだろう。作曲完成後、ドヴォルザークはこのように書いている。「生命力ある作品を提供しようとあらゆる努力を重ね、今この作品にとっても満足しています。」

ドヴォルザークの言葉の通り、まさしくこの交響曲は生命力に溢れている。爽やかな風が草原を吹き抜けるような第一楽章。鳥がさえずり太陽があたたかい光を投げかける第二楽章。「生命」を表すチェコの民謡フリアントを取り入れ、身体を揺らさずにはいられないほどの躍動感を生み出した第三楽章。二長調の明るさに満ち、オーケストラの奏者が全員で駆け抜けていくことを求めるような輝かしき第四楽章。「身体にいい音楽会」のメインとして、ポジティブなエネルギーに満ち溢れたこの交響曲をぜひともお楽しみ頂きたい。

### 第1楽章 Allegro non tanto

古典的なソナタ形式。三拍子の躍動する伴奏のうえに、四度跳躍が印象的な旋律が重なってゆく。これらの旋律はチェコの民謡Já mám koně (I Have Horses) とドイツの民謡 Grossvateranz (Grandfather Dance) とのミックスによって編み出されたようである。

### 第2楽章 Adagio

自由ロンド形式。ベートーヴェンの交響曲第9番の第3楽章Adagioを思わせる浮遊感のある冒頭から、太陽がふっと雲に隠れるような突然の転調まで、この作曲家の個性がよく現れた楽章。

### 第3楽章 Scherzo, Presto

チェコの民族舞踊フリアントを用いたダンサブルな楽章。トリオ部分ではピッコロが活躍する。主たる旋律はSedlák, sedlák, sedlákという民謡から取られた可能性が高い。本交響曲の中心を成す楽章で、初演時はこの楽章がアンコールとしてもう一度演奏された。そうした背景もあってか、チェコの指揮者、ターリヒ (1883-1961) はこの交響曲を「チェコ」の愛称で呼んでいたらしい。

### 第4楽章 Finale, Allegro con spirito

ソナタ形式。アレグロ・コン・スピリト（活き活きと速く）という楽想表記、2分の2拍子、二長調という調性、冒頭の雰囲気などがブラームスの交響曲第2番の第4楽章に似ており、両者の影響関係が指摘される。これまでに出てきた四度跳躍と対位法を駆使して壮大なフィナーレへと至る。

(執筆：木許裕介)